

## 教育心理学教室教官の研究状況報告

### この1年の歩み —昭和50年度— 村上英治

(1) この5年間、毎年、毎年の紀要に、その1年の歩みを書き残すとき、先学統教授とつながる仕事についてふれない年はなかった。学問の先達としての故教授に導かれてきた20年、その影響を改めて思うのである。この年、遅れに遅れを重ねたが、東大出版会刊行「心理学研究法」シリーズ、その9巻「質問紙調査」の編集を終え、上梓の運びに至ったのが、ちょうど3年目の御命日にあたる9月25日であった。生前統教授自身、名著のほまれ高かった旧著、同学社刊「質問紙調査法」をすっかり改稿し、それを軸として、従来の心理学研究法の公理をすっかり洗い直してみたいとまでうちこまれた御意図にどれだけ叶うものとなり得たか、きわめて心もとないものといわざるを得ない。でも同志社大小嶋外弘教授の強い励ましと、故教授から直接調査法の手ほどきを受けた弟子すじに当る方々の協力によって、ともかく公刊できたことを何よりも編者としては喜ぶたい。

「研究法」シリーズそのものもこうしてこの年完成した。編者としてかかわってきた「臨床診断」「面接」そしてこの「質問紙調査」と、これらの仕事をとおして、改めてまた、「心理学とは何か」「心理学における人間接近への道はいかにあるべきか」を自ら問いなおしてきた思いがする。伝統的な行動科学としての心理学の枠組みを、十分尊重するにやぶさかでないにしろ、なお苦悩と不安に生きる現世代での人間存在そのものへの接近は、こうした主客分離の思考法を今一步超克した方法論を始めて始めて成るものであることを、しみじみ考えさせられるこの頃である。

(2) 障害児へのかかわりの接近は、こうした志向に沿って、この年、より一層重点的につづけられた。臨床相談室における、母子通所形態による発達遅滞幼児への集団療育は、毎週1回3時間にわたる実践として、昭和47年以来継続してこれで4年目を数える。たまたま、志を同じくする仲間がこの年10数名にもふえて、1グループでは処理しきれず、火曜、水曜、二つのグループに分けての実践を行うことになった。したがって参加した子どもの数も多少の出入りはあったが、同様10数名に及んだのである。それぞれのグループが究極的にめざすところは同じにしても、この1年の療育をふりかえってまとめていく段階では、一応視点をそれぞれのグループごとと独自に

定めた上での討議を重ね、それらの成果は、一応本紀要の中に二つの研究報告として所載されるところとなった。水曜グループの実践が、「発達遅滞幼児の集団療育(その1) —かかわりスケールにもとづく発達のとらえ—」であり、火曜グループの実践が「(その2) —2者関係の確立を基盤としての集団志向へ—」である。こうした療育をすすめるにあたっての共通する理念は、これまでの沿革とあわせて、「その序説」として、二つの論文の冒頭に提起された。

(3) 障害児をめぐる家族の問題・地域の問題は、彼らの発達にさまざまな形で影響を投げかけるものとして現下の緊急の課題でもある。「自閉症児の両親のコミュニケーション—家族ロールシャツハ法による一考察—」として、「ロールシャツハ研究」17巻に山本秀人との共著で掲載されたのは、山本の昭和47年度の卒業論文にもとづき、それを再構成したものであり、家族間、特に障害児の両親間の相互作用についての一つの知見を提起できたものとする。

また6月、日本精神薄弱研究協会第10回大会での「施設をめぐる」のシンポジウムでは、地域社会の中での精神薄弱の発達の問題に焦点を絞って若干の提言を行った。その概要は、日本精神薄弱研究協会誌第8巻第1号にのべられている。

(4) この年11月、東京で開催された第2回アジア精神薄弱会議は、「すべての障害児に等しい権利を」とのスローガンのもと、アジア各地からの150名の参加を得て、国境を越えて共通する問題についての討議が週日にわたって展開された。印象深く忘れられない思い出である。その第4分科会「職員養成」において、マレーシアからのダニエル、D.R.と共に司会の役をとることを要請されたが、きわめて活発な討論をとおして、障害児療育にたずさわる職員養成についての現下の問題点がうき彫りにされたのは、意義深いことであった。これらの経過は最近刊行された和英両文から成る報告書に詳しい。

(5) 学生相談活動をとおしての、大学生の適応の問題に関連しては、この年もまた、75年1月、76年1月と2年つづいて東北大学の世話によって行われた全国学生相談研究会議で、また深められた。かねてからの課題でもあった、マッカーサー、C.C.らによるEmotional Problems

of the Student の全訳が、京都大学石井助教授らの盡力をもとに、この会議のメンバー全員の協力による全訳として完成し、文光堂から公刊されたのもこの年の5月である。第5章コーン、G.P. の「急性精神病・抑うつ状態・発揚状態」を永田忠夫との共訳で私も分担した。2年にまたがる共同作業の成果をふまえ、これら研究会議の今後の課題は、いわゆるstudent apathyの問題と、グループ・アプローチとに集約され、それらをめぐっての私ども自身の実践が、昨年にひきつづいて51年度もまた企画されている。

(6) 精神障害者への接近は、今年もまた、現象学的志向によるロールシャツハ研究を、「現象学研究会」の中で数名の仲間と共に、症例研究を中心として積み重ねてきた。従来の蓄積された資料とあわせ1本にまとめることを期しているが、今日まだまとめの段階に到っていない。しかしながらこれらの検討をとおして、「心理学における人間接近への道はいかにあるべきか」、冒頭にかかげた主題に沿った、私自身の現段階における中核の課題を、さらに問いつづけていきたいと考える。

## 研 究 経 過 報 告 久 世 敏 雄

「児童の心身発達の追跡研究」および「中学生・高校生の社会的態度に関する研究」は、継続中である。過去1年間の成果は、つぎのとおりである。

1. 「児童の発達特徴」「心理的離乳」  
広岡亮蔵編『授業研究大事典』 明治図書  
昭和50年4月
2. 「青年期へのアプローチの方法」  
井上健治ら編『有斐閣大学双書 青年心理学』  
有斐閣 昭和50年7月

3. 「青年期の自己開放性に関する一検討  
— 対象の類型の観点から —」  
教育心理学科紀要 22巻 昭和50年9月
4. 「中学生・高校生の社会的態度に関する研究(II)」  
(速水氏と共同)  
教育心理学科紀要 22巻 昭和50年9月
5. 「価値多様化時代と思春期」  
教育と医学 24巻3号 昭和51年3月
6. 「青年心理研究の方法論」学位論文  
昭和51年3月

## 一 年 間 の 研 究 経 過 村 上 隆

ここでは、私が本学に就職した昨年4月から、本紀要締切り(6月末)までの経過について述べる。本学に応募した際に提出した“研究経過と研究計画”には、主たる関心領域として3つあげたが、それぞれに則して、簡単に記することとする。

### (1) 心理学における測定の論理

一次元の心理的連続体における、差の判断の大小関係から、尺度値を求める、いわゆるdifference scalingに関する考察を続けている。Kruskal流のnonmetricな手続きによる解法のプログラムを作成し、(2)において利用したが、もしデータが、ある公理を満足していれば、この解は連立一次不等式の解集合となることが明きらかである。故に、この解集合全体を求めることにより、解の一定の範囲での一意性について明きらかにできると期待される。これは本年度の課題である。

### (2) 心理物理的尺度構成におけるそれらの論理の検討

上記difference scalingを適用して、対比効果を含む明度関数の形を決定する問題を取り扱った。ある種の原理的考察から、可能な関数型を幾つか導出し、あてはめを行なった。これによれば、

$$f(s, b) = p s^n + C \quad (s \geq b)$$

$$f(s, b) = p s^n + q |s - b|^n + C \quad (s < b)$$

なる関数が最もよくあてはまる。ただし、 $s, b$ はそれぞれテスト刺激と、背景刺激の比反射率である。現在、より詳細な検討を進めており、近く論文として発表する予定である。なお、これらの内容の概略は、昨年及び本年の日本心理学会大会抄録に掲載されている。

### (3) 多次元解析的手法

主力を注ぐはずであったこの領域が、最も不十分であった。わずかに、水野欽司、千野直仁両氏と共同で、潜在プロフィル分析の計算手法について検討したにとどまった。応用的な面では、研究生榎本阿津子と共同で、離